

近代性のゆらぎと「遊びとしてのスポーツ」の復権

丸 山 富 雄

The Fluctuation of Modernity and "Sport for Fun"

MARUYAMA Tomio

At present in Japan, sport based in communities, e.g. Sports clubs which are integrated in the community, have been strongly in demand. On the other hand, sport affiliated to companies is now gradually declining and with "Soccer J League", which was established in 1993, it is said, an era of new sport culture in Japan has been launched. These tendencies can be interpreted as those which correspond precisely to the structural changes of Japanese society as a whole.

In this paper, these tendencies are investigated in terms of:

- 1) characteristics of accepting and fostering sport in Japan
- 2) the fluctuation of modernity in general.

As a result, this author contends that many people now tend to prefer "sport for fun" which can give inner satisfaction to participants rather than competitive sport, where "achievement" plays a central role. This change originates in the fluctuation of modernity accompanied by postindustrialization of society. The community is therefore expected to be the main body for nurturing "sport for fun" instead of achievement-oriented institutions such as schools and companies.

Key words : Fluctuation of modernity, Sport for fun, Sport based in communities

はじめに——問題意識

2000年9月、文部省は保健体育審議会の答申を受け、「スポーツ振興基本計画の策定について」を告示した。スポーツ振興法第4条に定められている「スポーツ振興計画」について、国はこれまで、その成果はともかく施設整備や指導者養成など断片的な政策は行ってきたが、スポーツ振興法公布以来39年を経てはじめて、今回、数値目標を挙げながらの体系的・計画的な施策を講じたと言える。その背景には、審議会への諮問理由にあるように、国民のスポーツへの関心や期待が高まる一方で、近年の青少年の体力・運動能力の低下傾向、国際競技力の長期的・相対的低下傾向等の課題も露呈し、少子

高齢化等の社会状況の変化を踏まえたスポーツの一層の振興が求められているという現状がある。尤も、この基本計画策定の直接的な要因は1998年5月に成立し、2001年からその「スポーツ振興くじ」が販売となる、「スポーツ振興投票の実施等に関する法律」に対する環境整備と言えよう。それはともかく、この基本計画の目玉は「総合型地域スポーツクラブ」の整備育成である。総合型地域スポーツクラブは、文部省によって1995年度よりその育成モデル事業が始められ、2000年度までに65の市区町村が指定を受け、また日本体育協会やいくつかの県でも独自にその育成が図られてきている。そして今回それが国の基本計画の目玉となったということは、まさに本腰を入れて地域スポーツの

振興に取り組み出したと言える。何故、今「総合型地域スポーツクラブ」なのか、その必然性は何か、それが本稿の第一の問題意識である。

次に、東京オリンピックでの「東洋の魔女」の母体となった、名門ユニチカ（旧日紡貝塚）の女子バレーボール・クラブの廃部発表（2000年7月）は記憶に新しいが、いわゆる「バブル経済」崩壊後の平成大不況が始まった1991年以降、日本リーグに所属する企業チームの休廃部や活動縮小は136を数えるという⁴⁾。朝日新聞社の調査でも、1991年以降スポーツからの企業の撤退は、トップレベルのチームに限定しても177チームにのぼると報告されている²⁰⁾。その多くは「不況によるリストラの一環」や「業績不振の影響」などの経済的な理由からの撤退であるが、問題は景気が回復したらスポーツを再開しようと考えている企業はほとんどないということである。人員整理等のリストラの中での「企業スポーツ費」に対する存在理由が見出せないこと、また時代の変化とともに、かつての企業スポーツの経営的メリットであった「社員の一体感やモラル形成」と「広告・宣伝」に疑問が生じるようになったことなど、今日の企業スポーツには費用対効果がうまく説明できなくなったことがその理由である。不況が引き金になったとは言え、企業は何故、今スポーツを切り捨てる状況になったか、それがもう一つの問題意識である。

1993年からのサッカーJリーグの登場も近年のわが国スポーツ界の大きな出来事であるが、その百年構想から分かるように、それは「地域」という第一の事例に含めることができよう。ここで挙げた二つあるいはJリーグを含めた三つの事例は、この10年ほどの間に偶然に起きたものではなく、またそれらが単にスポーツ界の問題や不況という経済的な事情から個々に生じたものではないと考えられる。それらは互いに密接に関連しあい、わが国の社会全体の構造的な問題が必然的にこの状況を生み出したと言えよう。そしてこのことは、わが国のスポーツ

の歴史を振り返ると、将来に向けて現在がターニング・ポイントであるほどの大きな問題なのである。本稿では、この必然性をわが国のスポーツの受容、育成を踏まえながら、歴史・社会的に整理したいと考えている。

1. スポーツのエートスと両義性

近代スポーツ、すなわち競技スポーツが市民革命と産業革命を経た、特にイギリス近代社会の産物であることは衆目の一致するところであろう。18世紀から19世紀にかけて、宗教的に解放され、政治的・経済的主導権を確立したブルジョアジーを中心に、競争と業績が高く評価される資本主義社会、産業社会の形成過程の中で、競技スポーツも整備され、組織化、制度化されていった。その後、植民地政策や先進国を中心とする産業社会の進展の中で、競技スポーツも全世界に伝播・普及し、運動文化の覇権を握ることになる。あるいは逆に「近代スポーツとは、ヨーロッパの「近代主義」や「近代論理」を世界の各地に伝達するための運び屋の一翼を担っていた、といってもよい。たとえば、近代合理主義、数量的合理主義、ルール、法治国家、契約、民主主義、平等、自由、競争原理、効率主義、などなど」(10:229頁)とみることもできる。すなわち現在われわれがスポーツとしてイメージし、慣れ親しんでいる競技スポーツに問われる価値は、機能を優先し、効率や能力主義、合理主義が支配する産業社会の価値観とまったく同じであり、その普及・発展は産業社会と軌を一にしてきたのである。したがって、今日のスポーツはその語源・語義である「非日常的世界での気軽な楽しみ」からほど遠い、本来賞金目当ての競争を意味する競技(アスレティック)と同義の激しい過酷な競争となった¹⁾。ロイとケニヨン¹⁷⁾、ゲートマン⁸⁾、あるいはエドワーズ⁹⁾などのスポーツ学者は、いずれもスポーツを「公的に制度化され組織化された激しい身体的競争ゲーム」と定義しているのである。

スポーツには、スポーツ宣言の内容やジレ⁷⁾の定義にみるように、競争の要素と同時にプレイの要素が常に挙げられてきた。しかしそこで強調されることは、ホイジンガ⁹⁾等のプレイ論を援用した非日常性や非利害性、競争における結果ではなく過程の重視という規範であり、アマチュアリズムに典型的に示される日常あるいは実生活がスポーツ界へ侵入することを防ぐ、その汚染防止のための理論的根拠、保護装置として利用されてきたのである。したがって、そこでのプレイの存在理由は積極的なものではなく、またあくまでも近代社会や産業社会の枠組みの中でのプレイの解釈であったと言えよう。スポーツが高度に制度化されるに従い、プレイの本質や特徴であるゆとりや余裕といったフアジーな部分が殺ぎ落とされ、スポーツはグートマンが指摘する官僚組織化や専門化、合理化、数量化などの特徴を持つ精緻な競技となっていったのである。

しかし、かつての草野球などの子どものスポーツ的遊びを観察すれば、そこには「競技としてのスポーツ」とは違ったダイナミクスとエートスが存在することがわかる。厳密に規定された不侵犯の公的ルールがないからと言えればそれまでだが、そもそもそのようなルールの適用それ自体を拒む遊びのエートスがそこでは支配しているのである。ルールではなく、遊びの世界の外部からの要因（暗くなる、母親の迎えなど）によって、遊び（草野球）は終わりとなるが、それまでは延々と続く。ボイテンディクはこの遊びの力動性を円環運動あるいは往復運動と呼んだが（2：69頁）、遊び手と遊戯対象とが文字どおり共存した「目的志向性をもちえないパトス的關係」（3：240頁）をもったものである。「競技としてのスポーツ」は目的志向的あるいは業績志向的行為であり、前述のようにそれは近代社会の価値観と同じものであった。それに対し、この「遊びとしてのスポーツ」はそこに留まり、沈潜する楽しみを持つものであり、自足的な、山崎正和²³⁾の言葉を借りるな

らば目的志向に対する目的探求的な行為と言ってもよさそうである。いずれにしてもそれは近代性の尺度や価値観からは測ることのできないエートスを持っていると言えよう。

エドワーズ（6：55頁）がスポーツはもはやプレイとは接点を持たないと指摘する時、それは明らかに遊びとは違った運動文化、「競技としてのスポーツ」を指しているが、「遊びとしてのスポーツ」と「競技としてのスポーツ」は、スポーツの制度化過程の中で当然連続したものである^(注1)。「遊びとしてのスポーツ」は、糸野¹⁵⁾の指摘するプレイヤー・コントロールのルールが支配するインフォーマル・スポーツと同義ではあるが、効率や合理性という近代性の尺度で測れないという意味から、ここでは「遊びとしてのスポーツ」と言うことにする。そしてこの「遊びとしてのスポーツ」を担保するのは、参加者の「たかがスポーツ」といった目くじらを立てない余裕とゆとり、すなわち遊びの意識であることは疑いえない。したがって、スポーツが政治や経済、また教育などの名目によって手段化され、世俗との関係と言う意味で真剣になる時、「遊びとしてのスポーツ」はその存在価値を失うのである。

2. わが国のスポーツの受容・育成の特徴とその変化

わが国のスポーツが学校と企業、そして戦前までは軍隊をその受け皿として発展したことは多言を要すことでもない。学校、特に運動部でのスポーツの受容の仕方はその後今日までのわが国のスポーツを特徴づけるものになった。

明治の初期、外国人教師などによって輸入されたスポーツは、すぐに上意下達式に全国に普及していった。各学校では「運動会」などと呼ばれる体育会や校友会の組織がつくられ、当時の時代背景の影響もあり、チームや選手は学校の代表として、強力な母校愛、ナショナリズムのもとで対外試合中心の活動がなされた。つま

り、学生や生徒は個人的な楽しみでスポーツを行うのではなく、母校の名誉のため選手となり試合に勝つことが要請されたのである。この背景には指導者達のスポーツ信条も大きく関与していた。勝利至上主義とそれをカモフラージュするための精神修養のイデオロギーは、当時の特に飛田穂洲らに代表される学生野球界の指導者に強く見られた¹⁶⁾。また井上俊¹¹⁾も、嘉納治五郎が柔道の近代化を図る際、一方で精神主義、修養主義を掲げ、日本古来の武術の伝統とのつながりを強調し、「近代化の方向にそった彼のさまざまな企図や活動を正当化し、それらに対する幅広い支援をとりつけるのに役立った」

(11:122頁)と述べ、嘉納による「伝統の発明」を指摘している。このようなイデオロギーの中で、学校もチャンピオン・スポーツの教育的価値を強調し、組織化や運営、また会費徴収に対して強く関与することになる。その結果、生徒の自主性、自発性が制約されるとともに、スポーツにおける勝利主義の強調、また部の学校への依存的体質が常態化するようになっていった。これら試合中心の運営、勝利主義的スポーツ観、学校や行政などへの依存的・寄生的体質、また縦社会特有の権威主義と集団主義などの影響は、その後長い間、一般の人々の行うスポーツを含め、わが国のスポーツやスポーツ集団を特徴づけるものになったのである。

しかし昨今の学校運動部は少子化の影響をもともに受け、部員数の減少や顧問教師の不足と高齢化、さらには子どものスポーツからの早期ドロップアウトによって、部活動が成り立たなくなる現象も出てきており、大きな転換期を迎えていると言える。文部省でも合同部活動制や外部指導者制度などを導入し始めたが、学校運動部の地域への移行を含め模索中の状態である。また高校では、一部学校による海外を含めた県外優秀選手の勧誘によるスポーツ強化の問題や、競技会の在り方自体にも問題が出ている。ラグビーなどの競技では参加校の極端な減少に加え、一部の学校が競技力で突出するようになり、イ

ンターハイそのものの意義が問われている現状である^(注2)。いずれにしても、今日までわが国のスポーツを牽引してきた学校運動部も曲がり角に来ているのである。

企業スポーツの場合も同様に、戦後の労働運動対策の一つとして登場した「職場スポーツ」が、東京オリンピック前後から「企業スポーツ」という形で従業員のモラルの形成や広告・宣伝に利用されていった。このような役割は、1960年代、わが国が産業化に邁進する時代には極めて効果的であった。作田啓一²¹⁾は、東京オリンピック当時のニチボー貝塚チームは様々な要因が巧く結びついた一回限りの産物であるとしながら、当時の企業（繊維産業）の共同体的労働条件や世界と伍していくための日本の工業化の状況が、大松監督のハードな練習と根性論を可能にし、「東洋の魔女」を生み出したと明快に論じている。そして選手は当時の繊維産業を支えた少女達の夢を代理的に満足させるスターの役割を演じていたと指摘し、「選手たちの背後には、無名の娘たちの無言の声援がある」と、スポーツによる社員（少女たち）のモラル形成を示唆している。

しかし、1965年のサッカー日本リーグの結成以降、70年代にかけて多くのスポーツ種目で日本リーグが結成され、全国的なネットワークの中で企業スポーツはエリートスポーツへと変質していく。企業スポーツの役割も社員のモラル形成から「宣伝・広告機能」にシフトしていったと言えよう。選手は社員選手から選手社員、契約社員あるいはプロとなり、一般社員から物理的にも心理的にも遊離したものになっていった。イギリスのフットボール・フリーガニズムの遠因の一つは、労働者階級のイメージを脱ぎ捨てたスター選手が地元の人々（労働者階級の若者）から遊離してしまったことだ¹⁹⁾とも言われているが、今日の企業スポーツの場合も同様、この選手の遊離は、企業スポーツが持つと言われてきた社員のモラル形成というメリットをほとんど空文化させてしまったと言ってよい

だろう。一緒に働き、机を並べる身近な選手だからこそ熱心に応援するのである。それ以上に、私秘化やミーイズムの普及する今日、社員の気質も変わり、愛社精神の高揚やモラル形成ということ自体がもはや時代遅れとなったと言えよう。また広告・宣伝としての役割も、今日の情報社会の中ではより効果的な方法は他にいくらかでもあり、企業のトップチームの宣伝効果は相対的に低下してきている。しかもアマチュアスポーツ、特に社会人の試合は今日ではほとんどテレビ放映されることもなくなり、そのメディア露出度から換算しても企業スポーツの広告・宣伝の効果はほとんどなくなりつつある。いわゆる「横浜フリーゲルズ事件」と言われる、Jリーグ横浜フリーゲルズのメインスポンサーであった佐藤工業の撤退は、企業論理によるスポーツ支援あるいはスポーツ利用を如実に表わしているが、佐藤工業が特別であったということではない。ニコニコドーなども含め多くの地方中堅企業にとって、その世間的認知や企業イメージのアップが達成されれば支援の目的は果たせたことになり、簡単にスポーツから撤退するに至るのである。産業社会の枠組みからみれば、費用対効果が見出せなければその結果は当然と言わざるを得ない。

わが国のスポーツを受け入れ育ててきた学校と企業は、近代社会、産業社会が生み出した典型的な機能集団の代表である。再び述べるならば、そこでは機能と合理性、そして業績が問われる社会なのである。学校運動部と企業スポーツもまた、その目的達成のために作られ利用された目的志向集団である。そのようなスポーツを取り巻くわが国の風土の中では、近代性とはそぐわない「遊びとしてのスポーツ」はこれまでほとんど日の目を見ることはなかった。

3. ポストモダンと近代性のゆらぎ

センセーショナルな話題となったダニエル・ベルの著『脱工業社会の到来』⁵⁾以来、ポスト

モダンの論議が活発である。山崎正和は「黄金の60年代」が終わり、70年代は「日本の近代史百年のなかで、おそらくただひとつ、攻撃的な時代目標を何ひとつ持たない十年だった」

(23:17頁)と述べ、すべて過去に存在したものの消滅、すなわちわが国の近代化の終焉を指摘している。彼の指摘する、例えば国家の縮小と地域のクローズアップ、職場と家庭の縮小による「個人の生涯」の再発見、普遍的なものから個別的なものへ、またサービス産業、特に情報産業の繁栄と充実した時間の消耗という意味での「消費社会」の到来、さらには「産業化時代の……目的志向と競争と硬直した信条の個人主義にたいする、より柔軟な美的な趣味と、開かれた自己表現の個人主義の誕生」(23:68頁)などなどは、バブル経済崩壊後の1990年代に至ってますます明瞭化し、今日決定的になったと言えよう。このことはこの10年間の国際政治の場においても同様である。1989年のベルリンの壁崩壊に象徴される東西構造の終焉と、その後の旧ソ連、ユーゴスラビア等において噴出した民族主義の嵐、さらには2000年に入ってから南北朝鮮の対話と融和など、全世界で戦後の安定した国際社会の秩序が大きく崩れ、近代は確かに終わりつつあると言えよう。

厚東と今田¹⁴⁾は現代社会の構造的なゆらぎを「近代性」のゆらぎとして捉え、政治、経済、社会、教育、さらには知の枠組みや人間類型に至るまで、簡潔にその変化、ゆらぎ現象をまとめている。それらは文明的なスケールの変化であると捉え、近代社会、産業社会の機能優先の崩壊と結論づけている。近代性のゆらぎが機能優先の文明に代わる意味充実の文明への変態を予兆するとして、次の5つの社会シフトを指摘している(14:168-175頁)。

第1シフト—欠乏動機から差異動機へ: 行為動機の焦点が、豊かさをめざす生産労働に代表される目的—手段図式に従う行為(欠乏動機)から、豊かな社会の実現によって、差異動機による意味充実の行為が中心となる。

第2シフト—希少性から差異性へ: 社会の動きが機能

から意味へと転換することの経済への反映として、モノの価値を決めていた「希少性原理」が衰退し、情報の価値を決める「差異性原理」の重要性が高まる。これに伴い、モノをつくるうえでの活動基準である「生産性」が情報創造に固有な「付加価値性」に取って代わる。

第3シフト—効率人間から付加価値人間へ：付加価値創造が経済活動の中心になることによって、従来型の「まじめ人間」や「効率人間」ではない、アイデア探求型、付加価値を生み出す創造的人間が求められる。

第4シフト—管理システムから支援システムへ：付加価値創造とは新しい意味やアイデアを創ることであり、これまでのような効率や目標達成のための管理システムは通用しなくなる。利益享受を前提としない支援の仕組みが必要となる。

第5シフト—社会統合から社会編集へ：合意形成による社会統合から、可能な限り自律性や個性を認めながら、まとまりをつくっていく社会編集が要求される。そこでは排除の論理や覇権主義に代わる様々な個性の文化、民族、宗教がつくる異質な意味空間を前提とする。

このように近代性のゆらぎ現象は現代社会のあらゆる分野・領域で共通にみられる一連の動きと解釈できよう。しかもわが国の近代化の過程は、明治以降の百年間で、先進西欧諸国に追いつくことを目標に、西欧社会の制度、文物を強引に輸入し、急速なテンポで図ったがゆえに、西欧諸国にみられる近代性のゆらぎ現象よりもより深刻であると言える。近代化の過程で多くの文化遅滞の現象や、置き去り・等閑にしてきた問題が今まさに噴出している。60年代70年代の都市問題や公害問題、自然破壊に端を発し、現在は年金や福祉、介護等の諸制度、産業廃棄物等のゴミ処理問題といわゆる「環境ホルモン」の問題、原発への懐疑にみられるエネルギー問題、護送船団方式の神話が崩れた大手金融機関や保険会社の倒産、さらには青少年犯罪の多発化、凶悪化、低年齢化など、ここにきて一挙に問題が多発している。いずれも近代化を強引に推し進めてきた結果のツケとしてわれわれに課された問題であり、あるいは既成の安定した社会制度や規範がゆらぎ、問題解決能力を無くす中での現象である。スポーツもわが国の場合、典型的な文化遅滞の一つと言えよう。前述のよ

うに、歴史的にスポーツは学校や企業あるいは戦前の軍隊の中で普及・発展し、それぞれがその目的のための手段や道具として利用されてきた。すなわちコンサマトリーな自立した文化として成熟せずに今日を迎えてきたのである。その意味でわが国のスポーツは、ここでの文脈でいう近代性の特徴そのものを携えたままであったと言えよう。

4. ま と め

—「遊びとしてのスポーツ」の復権

近代性がゆらぎ、機能と効率、合理性に対し懐疑の目が向けられ、また既成の制度や価値観に対抗する様々な運動が起きているが、「競技としてのスポーツ」の体制にもそれは向けられている。

総理府の調査²²⁾にみるスポーツ実施の上位種目はウォーキングをはじめとする競争を含まない運動であり、また同様に若者を中心に非競争的なキャンプやダイビング、エアロビクスが、中高年層には登山や社交ダンス、ヨガ、太極拳などがブームとなっている。さらに競争をそれほど強調しないニュースポーツと呼ばれる多くのレクリエーションなスポーツや大学での体育会運動部に対する同好会の隆盛、伝統スポーツの見直しなど、これまでの「競技としてのスポーツ」とは異質な、しかも多様なスポーツや運動文化がさかんである。これらについて稲垣¹⁰⁾は後近代のスポーツを「下降志向のスポーツ」と呼び、また亀山¹³⁾はパフォーマンス・スポーツの台頭を社会の力点が産業化から情報化へと移行した結果の「滑走感覚のスポーツ」と捉えている。このような新しいスポーツの普及やスポーツ参加者の拡大は、人々の時間的、経済的ゆとりや健康志向、また医療費削減や自由時間対策に対する行政側のスポーツ振興策の結果ということは言うまでもないが、これまでの「競技としてのスポーツ」に馴染めなかった人々の大きなうねりとも捉えることができる。それは

「競技としてのスポーツ」がもつ目的志向的で機能優先の価値観ではない、意味やこころの充実を優先する「遊びとしてのスポーツ」が求められていると言うことでもある。まさにスポーツ界における近代性のゆらぎ現象が生み出した現象なのである。

このように考える時、今なぜ地域あるいは総合型地域スポーツクラブなのか、また企業スポーツの衰退という本稿の問題意識もある程度解釈可能となる。

ポストモダンの人々の求める意味やこころの充実、そしてそれを実現する「遊びとしてのスポーツ」は、本来の意味から学校や企業という機能優先社会では見出せない。その投錨地は家庭や学校、企業でもない「地域」と言うことになる。しかも磯村英一¹²⁾が規定する、地位や身分から解放された第三空間（レクリエーションのための空間）としての地域であろう。そこでは目的のための手段としての人間関係ではない、対等のパーソナルな関係の中で、自由と意味やこころの充実が達成されよう。このように学校運動部も含め、新しい運動文化（意味充実を求める「遊びとしてのスポーツ」）の受け皿は、地域社会の中に見出すことができるが、学校運動部の体質をそのまま地域に持ち込むことではない。第三空間としての地域でのスポーツクラブは、機能優先ではない楽しみ優先、また付加価値としての社交を最優先にしたクラブでなくてはならない。それが現在志向されている「総合型地域スポーツクラブ」なのである。

また企業がトップチームを抱えると言う意味での企業スポーツも、これまでの考察からも明らかのように、近代性のゆらぎの中でその役割は終わったと断言してもよさそうである。これからの企業の役割はスポーツ支援、特に地域スポーツとの関わりの中での支援が中心となろう。企業スポーツも含めこれまでの企業によるスポーツ支援は、目標達成のための機能的発想からの支援であった。利益享受を前提としない本来のフィランソピー、スポーツ・メセナが求

められよう。

チーム名から企業名を外し、ファンをサポーターと呼び、さらにはいくつかのチームでは会員による運営というソシオ制度を取り入れたサッカー・Jリーグの登場は、近代性のゆらぎ、近代スポーツの行き詰まりというこの時代に、まさにタイムリーな出来事であった。したがってJリーグに求められているのは決して近代性の原理や価値ではない。競技者はプロとして業績を挙げること（近代性の原理）が最優先されるのは当然であるが、リーグあるいはクラブとしての理念はその百年構想にあるように、地域に根ざした付加価値のあるスポーツ文化の創造でなくてはならない。しかもわが国のスポーツ風土や国民性に合った仕掛けが必要であろう。Jリーグ、総合型地域スポーツクラブはいずれもヨーロッパをモデルにしているが、制度の定着を焦るあまり、明治以降の文化遅滞の轍を踏まない様になければならない。Jリーグが発足した1993年から現在まで、果たしてこのような理念どおりの運営やクラブづくりがなされてきたであろうか。結果を早急に求めるあまり、外国人選手に頼り、また毎年多くの選手が入れ替わるチームづくり、観客動員と会員獲得による収入増だけを企図するような運営方法では、一部の熱狂的なサポーター以外にはソッポを向かれよう。「私たちのまちのチームだから応援しましょう」という掛け声や論理は、一般の人々にはまったく説得力はなく、その訴えは通用するものではない。地域の人々がサッカーをはじめとするクラブの様々な活動に参加し、そこに楽しみを見出せるような、多くの住民を巻き込む複合的な事業運営が必要であろう。それはポストモダンに求められる付加価値の創造であり、結果や機能、あるいは繁栄といった次元とは違う、意味や豊かさ、ゆとりを、あるいは活力ある安定を重視することではないだろうか。そのようなクラブ運営によってはじめて、Jリーグはその理念であった地域のスポーツ文化創造の核となり、必然的に観客や応援も増えることで

あろう。すなわち理念どおりの「地域密着型」のスポーツクラブとなろう。Jリーグや地域のスポーツクラブには、ゆたかな充足感をもたらす「遊びとしてのスポーツ」の復権が求められているのである。

(注1) 筆者¹⁸⁾はかつてポイテンディクに依拠しながら、遊びからスポーツへの機能変動について考察した。円環運動、往復運動としての目的志向性をもたない遊びは、目標を持つことによって未来主義的な他の生の局面、「達成行為」(Leistung)あるいは「競技」(Wettkampf)としてのスポーツになる。しかしその遂行形式あるいは力動性は直線的な志向性ではない、状況の中でパトス的に共存しつつ目標に志向する「螺旋的運動」を示す。したがってその世界は「存在価値の世界」を内包した「抵抗と手段の世界」という両義性をもつ。ここでの「遊びとしてのスポーツ」はこのパトスの共存や存在価値の世界を最大化したスポーツと言えよう。

(注2) 全国の都道府県でも同様であるが、高校ラグビーの全国大会、いわゆる「花園」の2000年の宮城県予選出場校は15校にまで減少し、最盛期の4割程度になってしまった。また前年度の同佐賀県予選の決勝は203-3というまったくミスマッチのスコアであり、他に3県でも決勝で100点以上の差がつくなど大差の試合が多かった。

【参考・引用文献】

- 1) 朝比奈一男・水野忠文・岸野雄三編, スポーツの科学的原理, 大修館書店, 1977, 63頁.
- 2) Buytendijk, F. J. J., *Wesen und Sinn des Spiels*, Kurt Wolff Verlag, 1933.
- 3) ポイテンディク, 大橋・斎藤訳, 女性, みすず書房, 1979.

- 4) 中国新聞「アマススポーツNOW」2000年8月22日付.
- 5) ダニエル・ベル, 内田他訳, 脱工業社会の到来, ダイヤモンド社, 1978.
- 6) Edwards, H., *Sociology of sport*, Dorsey, 1973.
- 7) ジレ, B., 近藤訳, スポーツの歴史, 白水社, 1974.
- 8) Guttmann, A., *From ritual to record—the nature of modern sports*, Columbia University, 1978, pp. 1-14.
- 9) ホイジンガ, J., 里見訳, ホモ・ルーデンス, 河出書房新社, 1971.
- 10) 稲垣正浩, スポーツの後近代, 三省堂, 1995.
- 11) 井上俊「『武道』の発明」ソシオロジ 115:111-125, 1992.
- 12) 磯村英一, 都市論集Ⅲ, 有斐閣, 1959, 142-151頁.
- 13) 亀山佳明「スポーツと日常生活にみる滑走感覚」井上俊編, 現代文化を学ぶ人のために, 世界思想社, 1998.
- 14) 厚東洋輔・今田高俊, 近代性の社会学, 放送大学教育振興会, 1992.
- 15) 糸野豊・佐伯聰夫編著, 現代スポーツ指導者論, ぎょうせい, 1988, 15頁.
- 16) 日下裕弘, 日本スポーツ文化の源流, 不昧堂出版, 1996, 165頁.
- 17) Loy, J. W. and G. S. Kenyon, *Sport culture and society*, Macmillan Company, 1970, pp.56-70.
- 18) 丸山富雄, 遊びからスポーツへの機能変動に関する一考察, 仙台大学紀要 12:1-14, 1980.
- 19) リース, C. R., A. W. ミラクル編, 菅原監訳, スポーツと社会理論, 不昧堂出版, 1991, 90頁.
- 20) 左近充輝一, 「不況とともに崩壊・企業スポーツ(上)」朝日総研レポート 145:5-29, 2000.
- 21) 作田啓一「バレーボールの中の共同体」作田啓一, 恥の文化再考, 筑摩書房, 1980.
- 22) 総理府「体力・スポーツに関する世論調査」1997.
- 23) 山崎正和, 柔らかな個人主義の誕生, 中央公論新社, 1987.